



與兵衛 ひぢりめん  
おかめ  
卯月紅葉

廿二社めぐり

次第ふるき都や難波濁。ふるき都や難波濁。二十二社詣。フシ急がん。戀といふその水上を尋ねれば。神と神とが肌ふれて。抱寄せ給ひし腹帯の。スエテとけてほどけて世にこほれ。産みひろめにし人種の小オク次第。々々に孫つぎて色の道には發明な。町の小娘若嫁の。まねる芝居の女形。髪かみの結むすひぶりり小利こりに。ひつくるくく廊りやう様さま。今は向むかぬと縫ぬい箔はくの。それにはあらぬ白しろの風かぜ。フシ風呂の煙のたち居いまで。ハルフシ姿すがた似にせれば心も共にオク染ぞまる。紫縮むす縮むすの小皺しわのよりし姥おば唄うたまで。キン情なさけこめたる此このの時代とき。増年とせ経へて爰こゝに石いしの上うへ。古道こくど具屋ぐいやの古格こかくな。堅地かぢの父ちちの親おやの手てを水みづ離はなれせぬお龜かめとは。人衆ひとの命いのちをば。フシ萬代まんたい祝いわふ名ななるべし。

正五九月の神參り殊に此の頃我が親と。初元結の我が夫うとと舅おやぢの挨拶あいさつの。中に節ふしだらら早苗はやなつめ月つき。スエテ五月の雨は神心。夫の身の上安穩やすんに。田鼠ねずみを潤うるす其の如く。苗代なほしろ水みづにせきかけて。フシオクオク惠めぐみめや。あまの。川崎かわさきの。スエテ大権現を伏拜ふくはいむ。此の御神の君が代を。聞くも。語るも有難ありがたき。蝦夷えみか千島せんじまや朝鮮ちょうせん國こく琉球りゅうきゅう延えん敷しき島しまの。此の日の本の外とほ迄いたも。フシ御威光ごゐこう四方しやうに飛梅ひばいの。天満あまなの社やしろに手習てならひ子供こども。書いて上げたる龍虎りやうこ梅竹ばいちく絲屋しやの小絲こいと。姉は十三妹は十二。殿御とのごほしさに宿願しゆくがん。かけてる。フシ月の参りは。二十五日やつさ。ありやそりや。堀ほりこりや堀川ほりがわの惠比壽えびす殿どの。北野きたのは天満あまなと御一體ごいつたい荒人あらいにん神かみと音高ねたかくとどろ。とゞろと。鳴神なるかみも。よもや破やぶら

此の神明に祈らばや。扱あつか六番むつぱんは。曾根崎そねざきの。宮みやの木立こたてもいつごろよりか。小オクこおく名立なだてて。がましき天満屋あまなやお初はつよそに聞くさへ身にみ。水みづの流れの勤こつめめのうき身み。どうで女房にようばうにやもたれぬ中の死しぬる生なまきるは愚おろの沙汰さたよ。おれはそれをと願ねがふぢやないが。男おとこ故ゆゑなら命いのちも身み上じやうも取とつて行いけ。どころへの。こゝらでの。お手引おてひき合あうて二人ふたりのかばね。こゝに梅田うめだのナ橋なはしに寝ねてサ夢さむを津村つむらの。フシ新御しんご靈たま。人の祈いのちりは様々の大明神あきほのかみや其の次つぎは。仁德にとく帝ていの宮所みやしろオクオク拜をみ。めぐりて十番じゅうぱんに數かずも願ねがふも三津寺みつでらの。フシ正八幡せいぱちまんに。ひかされて心こゝろも足あしもしやなくしやなら。ちよつと立見たてみの手て毬まりの曲まがは。中ちゆう歌うたひいふうみい。よういつつむなな八やちよろよろく。フシとんとはづむも可愛めづらし。明日あしたも来こうぞの。惠めぐみ比ひ壽す橋はしや。惠めぐみ比ひ壽す橋はし越こえて。見たみたや見みせたや難波ななば橋はし。フシ難波ななばの今宮いまみや。是こゝからは。野道のちみちの風かぜの涼すずしさに。オクオク笠かさも頼たのずも晴はれ々はれ々

と。兩の袂に吹きたまる。歌身もひやくと。心よき。肌をしめさせ。しめてもらはば此方からも。じつとしめく。ハツミ空もしめりて。フシ五月雨の。スエテ雲のすゞしの帷子の。衣紋つくろひとりなり直しヱクリ髪かき。なづる挿櫛の蒔繪に似たる松原は。安井の天神是ぞとよ。長地天王寺には十五社の鎮守を一社と伏拝み扱十四番十五番。南東の門前の午頭天王に我が願ひ。幾つとはなき生玉の玉の光りの。すきとほり神は見通し。云はずとも。心の底の只一つ。それを頼みに。フシ北向の。八幡宮の御誓ひ。世々に高津の坂道を。歌登ればさつさ。下ればさつさ。さつさ三六。地十八番こも難波の大君を。唐土人のほめ詞。咲くや此の花今とはて。梢も青き夏木立。西を遙かに百舟の。入江の秋の海面に。歌沖津白浪。さばけて忍べ。碎けて遊べ。中よい月に。たはふれ遊べぬい。遊べぬい。君と。くく照るく月。くくてるく君と。

寝たらば何とよござるまいかの照るく月。照るく月や。フシ月よみの。ハルフシ朝日の神明。頼づきて。仰向く顔にあたる日を袖でかざしの玉造り。稻荷の宮居こも亦。伊勢の外の内平野町大神宮よと色々の。諸願のたねを上町の。座摩のお旅所に二十二社拜み。納むる袖神樂。乙女子ならぬ神子町に問ふべき占のあればとて。まだ日の足も南へと。駕籠の息杖息つがす走らせ。てこそ。三重へ。愈ぎけれ。フシ幼き時より。地氣に入りて幾春秋をふりと云ふ。年季の下女を身になして。隠す事をも語りしは。フシ黒格子の辻とかや。地上手と聞きし神子の門あ、申し。ちと口寄を。地頼みませうとぞ案内ける。弟子の小女郎心得てお通りなされと戸をあくれば。お龜は一間に入りにけり暫くあつて立出づる。神子もよつほど見えるもの。調ア、ようお出でなされました。大阪のお家で御座りますか。お供の爰へ上つて先づあふいであけ

さつしやれ。地お茶持ておぢややとあじらひは。あいころがうしの若神子の。フシ口と口とも寄せまほし。調して先づ御用の事ありとは。生口か死口かと云へば。いやさればとよ頼み度きとは生口なるが。海山隔てし方でもなし。地只二三里の道を越え五日六日の便もなし。どうがなかうがなくよくよと。案じわびたる御身の程。フシ寄せてたべとぞ仰せける。地神子は合掌目をふさぎ。數珠をくりひく梓弓。スエテ神下して寄せにける。地天清淨地清淨。内外清淨六根清淨。天の神地の神家の内には井の神。庭の神籠の神神の數は八百萬。過去の佛未來の佛。彌陀藥師彌勒阿闍。觀音勢至普賢菩薩智惠文殊。三國傳來佛法流布聖德太子の御本地は靈山淨土三界の。フシ教主世尊の御事なり。地此の御教への梓弓釋迦の子神子が菴音に。引かれ誘はれ寄り來り逢ひ見たさに寄り來たよ。なう懐かしの台の枕や。調我懐かしとはおほつかなみの寄り

来る人は誰ぞいの。太夫、千子、誰とて二人思ふ身か。一つねふしの双股竹與兵衛を。夫と思へばこそ問うてたもつて嬉しやの。問はれて今の恥かしや扱世の中の憂き節はなう。我がよきに人の悪しきがあらばこそ。

破れ車でわが悪い。とは云ひながら扇の影の立烏帽子。舅といひもとは伯父。跡嗣の約束なれば今では親子ぢやないかいの。何しに粗略にするものぞ在所の生の親達より。猶孝行を盡せども。丸い横桶に角の蓋心。が合はねば是非もなし。恨も仇も外になし。憎いも辛いもたゞ一人。重きが上の小夜衣。よなう。ワキ、恨みありとは私が事か。おの様の女房よ仕方の悪い事あらば。なぜ殺し。なりともなされずして何か恨みのあるぞとよ。太夫、二世と契りていとしいもの。そもじに恨のあるべきか。小夜衣とは親ならぬ親の手かけの茨草。目をつく様に屋の内を立てうと伏せうと儘にして。地陰言中言さ。へ口立つてはふすべ居ては譏り。何が

な見出さう聞き出さう目に角立てる仁王顔。物には阿吽ある故に道具仲間の商に。損もする又徳もとるゆすれば落ちる木の葉の露。我が身にかゝる商賣のそれにおろかのあるべきか。又してはく道樂者でのら者で。在所へ戻せいなせとて額に角も入れたもの。丁稚小者を云ふ如く。内の手代や庭寶の悔り者になし果て。あの女めが弟を内へ入れうと云ふ巧み。町内からも小柴垣ゆひ立つれども世の中の。調樂の灸は身にあつく毒な酒は甘いとや。何を云うても氣に入らず牛は嘶き馬は吼え。理は非に落ちる左繩ゆひかひもない身なれども。在所に歴きと親もあり。敷金してあの下司めに使はれう苦はない。エ、口惜しいわいの腹が立つわいの。舅の家を出るから下司め

たつた一打に。仕舞うてのげうがいや出所へ連れて出て。首に繩を掛けうかと。思案はしたれども。家の名を出すそれのみかそもじと縁が切れうかと。是が第一悲し

うて情ないやら無念なやら。弦なき弓に羽抜烏立つもたゞれず居るも居られぬ家の内も。そもじに心引かされて破れ唇にあらねども。あだな月日を數へたよなう。粉糰三合有るならば入聲すなと云ふ事は我が身の上のたとへかや。四十貫目と云ふ敷金をあの女めにちやかさりよかと。涙がこぼれて口惜しいわいなう。ワキおいとしや。あの今めと云ふ奴を出入も止めうと思へども。母様の存生より居たる者の事なれば。生若

は母様の十三年忌も仕舞ひまし。ふつと出入を止めさせんして此の間五七日は。河内へ歸りて御入りかや。そよとの便もない事は扱は我にも秋風かや。太夫、何しにそもじに秋風の。立田の山のマ、初紅葉。故郷へは錦を着て歸ると申す。今すぐく。と此の姿何とて在所へ歸られん。晝は生玉天王寺天満小橋に河口を。終日歩む時もあり或は芝居で日を暮し。旅籠に命を養ひて。

暮るればそもじが懐しく。人目忍びて門に立ち軒の下なる長持に。そつと隠れて折々は。もしも二階の格子から顔も見えるか。聲するか。蓋を明方近づけば立出で歸り夜毎には。猶しも思ひ深草の榻に通ひし車長持。廻り逢ひたや語りたや。語るに盡きぬ生口も今は是まで梓弓。引いては歸る習ひなりともしばしが程と。せめて止むるかひもがな。本夫かひこそなけれ縁あらば。ワキ逢ふも不思議。本夫逢はぬも不思議。二人逢はずは何を玉の緒も絶えなば絶えねと伏し沈み。死したる人に逢ふ如く名残を包む涙の袖。寄り来るよりの生口は。フシ神上。りしてさめにけり。地親の意見は直なれどそばのとりにし横時雨。どこを先途にさして行く傘屋與兵衛在所へも。面目なしと戻り兼ね心は有頂天王寺。フシ神子町に迷ひ來りしが。地お龜は神子に一禮して立出づる門口に。下女が見付けてあれ與兵衛様。どれどこに。地是はお龜か與兵衛様かあんな

り便宜もない故に。生口寄せに來ましたがなぜに戻つて下されぬ。おりやどうならうと構はぬ氣かと。スエテすがり付いてぞ泣き居たる。おれとても和女に心が引かされて。在所へも得歸らず。地大阪中を立迷ふ雲助同然の身持となり。今日は河内へいかうかと小堀口まで行つたれば。親父とかまの今めとが是も在所へ行く風で。跡から來たをちらりと見てやうやう逃けて戻つたが。地おれを見たか知らぬまで怖い事ぢやと語りける。見付けられたら大事か恨みも腹の立つ事も。私に免じて下さんせ。昨日はわしが氣晴らしとて。父様と半四郎の心中狂言見たれども。餘の事は耳へもいらす半九郎お染が最期の臺詞。此方の胸に皆こたへ。二人死ぬなら死にたいがこな様死んで下さりよか。どうかかうかと思つて居て四郎五郎か不心中面白いとて笑へども私や一日泣いてゐた。泣いてはばかり居たわいのと。袂に取り付き聲を揚げ十五に

なるやならずにて。夫を思ふ眞實のフシ歎きの。涙ぞ奇特なる。地あれあれへ見ゆるは親父ぢやないか。萬緒笠は今めぢやわ。地逢うてやかまし愛御免と。フシ神子の門にぞ隠れける。地親長兵衛は手代を連れ大汗流して來りしが。今大聲上げてやあはお龜様。廿二社巡りとてあぢな所へ來てござんす。如何に男を持つたとて若い姿してびらしやらと。あんなまりはたへさつしやるなど。地噓みつく様に夕立のフシ鳴る雷の如くなり。お龜ははづと恐ろしく今日のついでに母様の十三年忌の口寄に。ちよつと寄つた迄の事。して父様はあの人連れていつかたへと云ひければ。おれとされば與兵衛めが。在所へは戻らいで。町の會所の帳箱に入納めた譲り状。身が使と偽つて取つて行んだと年寄から。断りが云うて來た。彼奴に譲る讓狀取つて何になる事ぞ。家を棒に振りをるか但しはどうぞ公事たくみか。百頃は此所な女子と。いひ事小言が絶えね

ども五分々々に聞いて居た。彼奴が悪いに極つた河内の親に言渡し。ぢきに持を明けんため來ればあれで見付けたが。此地邊へはうせぬかとうそく見廻し神子の門。こりや爰にけつかるゝと引出せば與兵衛は。かづき菅笠身に纏ひうろく出でし其の風情。お龜はわつと泣出す。フシ笑止千萬哀れなり。○ 妾笑つてこれ與兵衛様。此の生粹なわたくしを。熊鷹の熊手のつかみづらのと異名をつけ。八町まちへ名を立てて。地ヲ、心の直な跡取様。かうした事をなされても。是でも家が立ちますか。コレ與兵衛様やあ。フシ與兵衛殿様とぞ喚きける。地與兵衛はさ。しうつぶいて居たりしが。顔を上けてこれ女かましい。エ、恨めしい親父様。あの家屋敷家財まで私夫婦へ譲りの約束。なれば親子と存する故不祥の事も堪忍して。心一ぱい働けども何をするのもお氣に入らず。在所へ歸れ戻れとはヲ、ヲ、道理かな。家屋敷家財まで今が弟の傳三郎に。

取らせるとある讓狀。此の與兵衛が聞いてゐる。明日でも親父様もしもの事も有つた時。町家が立合ひ讓狀を披いて。傳三郎に跡式取られ。此の與兵衛が悄々と生きて在所へ歸られうか。是誰がわざと其の女めとの談合ならん。此の事を某には誰が知らせたと思ふぞや。おのれが弟の傳三郎。今迄おのれら一本と思ひしに。奇特にも傳三めが天道が怖ろしさに。知らせますると告げし故後口の證據に取つたるぞ。おのれはおのれと思へどもさりとはは親父様。可愛い娘の男なり甥子とは申さぬか。さうはなされぬ筈なりと聲を上げて泣きければ。お龜は傍にひつ添うて母様生世の折なら。ば。彼等に口を利かせうか母様は此の世に。伯母様といへば目は見えす。夫婦は誰をたよりにせんとエテ口説き歎くぞ。哀なる。長兵衛肩をひそめ。是はゆめく。覺えなしおのれを町へ引めして。すぐに出した讓狀身が目を塞がぬ其の内は。年寄行

事も封を切らぬ書置を。傳三が知らず筈がない。讓狀を奪ひ取つて親に難題いひかけ。今兄弟に無實をいひ大阪に置かぬ公事巧み。地おのれ一人が智恵でないサア讓狀が物を云ふ。三國輪で讀んで見よと懐中へむさほりつく。聞いやこれ親父様でんとで披く讓狀。後の證據に封じも解かず持つたれば。此方の手へ渡さうか。地権柄になさるゝなど。もぎ放せばこづかを取り引伏せく踏んづ擲いつ。さんさんに打擲し引起いて讓狀。奪取つたる有様はオクリ目もあてへられぬ次第なり。地ヲ、成程身が判封の儘。只今披く是聽けと封を解いてぞ讀みたりける。北久太郎町心齋橋表口五間半。裏ゆき町並貳拾間家財残らず。娘お龜聲與兵衛夫婦に譲り申し候。外より異亂少しもなし如件。是は見よと。與兵衛が目差付くるをよ。くく見れば紛ひもなき。我方への讓狀八月。ア、南無三寶。扱は傳三郎めが賢人面を見せかけて。我を取つて落さん爲裏の裏を喰業

けせしを。知らではまりし悔しきよ。たばかられし口惜しやとステ歯がみを。なして泣き居たり。地長兵衛も怒りの涙こりや卑怯者。人な恨みを皆おのれが誤りぞや。母なき娘が大事に思ふ輩が何とて憎からん。皆根性のひがみから親にも恨み出来るぞ。恨めしの心やと讓狀を與兵衛が。面に打付けどうと伏しッシ大聲。あけて泣きければ。地妾はいきつて科もない。傳三郎にいひかぶせしやるなと啼りかゝつて怒りける。娘は我が親我が夫中に立つたる遺瀨なご。

入りつどごどのはずみに長兵衛。駕籠を抜けるを町人どもエ、面倒なと押込みて。駕籠昇き上ぐれば長兵衛ヤアこりや違つた違つたと。わめけど更に聞き入れず大阪の方へ界いて行く。お龜は歎きこがれしを下女や手代が手を引いて。なだめ歸れど立歸り留り。見返り呼びかけて。息をばかりに泣きかはす山時鳥舉月雨。涙の雨も古道具屋の聲ばかりして面影は。隠れがさやの憂き名残り別れ。別れに三へ成りにけり。

### 中之巻

地サア拵へさんせ出さしやんせと、ッシ何の氣もなく誘ひける。観音様と聞くからに未來の縁も嬉しけれど。親父様も留守なりこれも仕立てて仕舞ひたし。今日は連になりますまい。地よう拜んでやと云ひければ。夏白無垢が入る事か詣らしやれと云ふもあり。よしおかしやんせ今のおじやつて見やつたら。留守明けたとやかましからう。ほんにお龜様も能い姑を持たんした。こちらばかり廻りませう與兵衛様とこな様と。一つ連と拜ませせうと。云うて出づるも常なれど、ッシ思ひあればや身にぞ染む。地斯る所へ與兵衛は今朝迄うかくさまよひありき。心も空に行くともなく我が家の門を徘徊す。お龜はちらと見るよりも是誰もな

ればとよ。これはかうはして置けども是非

に叶はぬ其の時は。地わたしが方から知ら

せをせう必ずそれ迄短氣な心持たんすな。

こな様いかう狼狽へてぢや心を納めて下さ

んせ。ひよんな心を持つまいぞと力を付く

る其の中にも。さすがは年も豪氣のいつそ

連れ立ち走りたいと。また緋り付き抱き寄

せ。フシ引寄せく歎きける有様。こそは不

便なれ。下女のふりはさし心得門に立つて

西東。心をつけてゐたりしがあれ脚堀の伯

母御様。駕籠が見えると駈入れば。こは何と

て與兵衛が咄をめさつた故。地あるにもあ

られず氣遣はしく。扱こそ見舞に。フシ來た

るぞや。總じて入家人婚に小言のあるは慣

ひなれど。和女や與兵衛が親々は伯母が爲

には兄弟なり。調和御寮達は甥姪なりどち

らに最良偏頗もない。まんろくを云ふ時に

皆與兵衛めが悪いぞや。地胸前垂に草鞋が

け親の辛苦一つにて。仕出いたる此の身上

それをまねぶが子の作法。調何であらうぞ

唐物屋衆さへならぬ程に。ぞべくと着飾

つて諺講の俳諧の。若いそなたを女房にも

がら與兵衛めは。氣の弱い生れつき無分別

の出ぬやうに。女夫あひをようしや。内

に悪魔のあることも憎い者は生けて見よ。

これも世上の不詳ぞかしア、あさましや

此の伯母が。年はよる目は見えす。連合に

は離るゝ子は養子なり嫁がかり。明日が日

往生申しても骨を拾うて眞實に。泣いてく

れるは與兵衛とそなた。子同然にいとほし

くよいが上にもようしたく。朝夕の看經に

も其方女夫を祈るぞや。お袋が此の世にな

らば是程苦勞は聞かじもの。恨めしの婆嬖

シ戸を明けてこそは隠れけれ。地程なく駕

籠を昇き入れて。伯母も下るればお龜は是

はようこそとオクリ手を引きへ奥に入りけれ

ば。地供の女は駕籠昇に。錢を渡しも歸り

ませう。晩方迎ひに参りませうと。フシ言う

て其の儘歸りけり。地伯母は溜息ほつと吐

き。調爰のはまだ戻らずか。今朝こちへ來

し。鹽を踏ませて人にしや。地とは云ひな

らぬとて。此の前人に貰ひしが。色變りし

葉

月。卯



か知らねども若いものは嗜みぞ。與兵衛と

着に打入れて伯母御遊んでお歸りなされ。人連にて在所へ行き今兄弟と公事をせん。卯

其方が肌の物に纏うてしや。男も女子も

我等は町の年寄へ聲のすりめが談合に。参

此の暮粉れに早うくと云ひければ。ヲ、月

旅他國どこでの様な事あつても。肌の物

ると云うて出でけるは。フシにがくしくぞ

我もさう思ふ故壁は餘程崩せしが。壁下地紅

のよしあしにて。常まで思ひ。フシ知らるゝ

見えにける。地お龜はさまく心亂れ。伯

の大竹を切る音の響きては。如何あらんと

と。地渡せばお龜。忝けなしと。夫諸共。戴き

母様ちつとお息みと。フシ奥の間にこそ入り

云ふ所へあれく芝居の替りの太鼓。サア

て跡まで清くあらはせし。心の色の緋縮緬

にけれ。無慚やな與兵衛は網代の魚の如く

此の間がよからうと脇差抜いて切破る。音

オウリちむ。命ぞ果敢なさまよ。フシ時に亭

にて。倉の窓より顔出し水にても湯にても。

も嵐の三右衛門替りくと打つ太鼓に隠れ

主。地立歸り見世の道具を見廻す間に。あ

せめて。煙管火繩は懐中す。お

て餘所には。三三。知れざりけり。地今が弟傳

れ父様のといひければ與兵衛裏へそりと

龜來らば火が欲しやと。フシ咽喉かかかし待

三郎かくとも知らで來りしが。旦那は留守

抜け。細目に明いたる倉の戸を明けて内に

ちけるが。地エ、思付いたりと倉の案内覺

かお龜様は奥にかど。裏へ通つて後より遠

そつと入り。くろゝをはたと落しける。地

えたり。水晶の根附尋ね出し艾を少し押當

慮もなくしつかと抱く。地エ、番くろし誰

長兵衛は不機嫌顔ヤア。伯母お出なされた

て。入日の窓に差向へばけに炎天の極陽

ぢやいや。ム、傳三郎か。主といひ主ある

か。手代どもは一人も居らぬ。何處へうせ

の氣。水晶に火移りてオウリ艾へ燻り出で

身に。此の様な不作法は覺悟なうてはなら

たと云ひければ。お龜聞きもあへずはて忘

るを。フシ火繩に移し。やすくと。煙草に

ぬ管。其の根心が聞きたいと騒がぬ顔でう

れさしやんしたか。一人は河内のおぢ様へ。

氣をぞ休めける。地お龜は伯母を癡入らせ

ら問へば。ハテ根心として別はなし。與兵衛の

一人は尼が崎へ買物にやらしやんした。ヲ、

て倉をほとく叩きける。地與兵衛顔を差

たわけめはどうでも爰には置かれぬ談合。

それを何の忘れはせぬ。地未だ歸らぬか野

出し。地是は何たる不仕合。云ふ事する事間

地君さへ合點なさるれば賤が掣になるちや

良どもと表裏を見廻して。地是はく。男

に違ひ獨り網にかゝりしは。如何なる因果

けな。但し阿呆がお好かと。フシ猶理不盡に

切は一人も居す倉に錠もおろさぬか。地扱々

と泣き口説くお龜は思案やしたりけん。斯

抱き付く。地ヲ、聞えた扱はかの讓狀も。

無沙汰千萬とつぶやきく。錠おろし。鍵巾

なる上は一心をす壁を破つて逃出で。二

其方がだまして取らせたか。如何にもく

町儀が何とも濟まぬ故。手盛にさせて喰はせたる。地才覺を御覽せと。云ひも果てぬにテ、それを聞かうと云ふ事よ。詞あれ間男よと。地聲立つる口に袂を捻込んで。絞め殺さんとする所を與兵衛壁より這出でて。むんずと組んで引きければ、フシお龜は奥に逃げ入りける。地己れ不義者身上の敵と。つかみついて組合ひしが傳三郎は剛力者。非力の與兵衛を取つて投げ。足をためす逃失せしは、フシ残念なりける次第なり。地さがわがしきは何事と亭主歸る折節に。手代も皆々立歸り裏へ通れば與兵衛は。南無三寶と起上り狼狽へ廻つて切明けし。倉の壁へ這入る所を長兵衛飛びかゝり兩足擱んで引きずり出し。詞ヤレ與兵衛めこそ倉の家後を切つたれと。地呼ばはる聲に驚き伯母はお龜に手を引かれ。そも實かとばかりにてスエテあきれ。果てゝぞゐたりける。地道具はあ

ぞ不思議と燻つたる。火繩又を取出すはッシ詮方なうぞ見えにける。地親ははらく涙をこぼし。如何なる天魔が入換つたか。町衆を騙つて讓狀を取出し。大恥かいたる昨日の今日親の倉の家後を切り。此の火繩の火は何にするヤレ罰當りめ。八百屋お七を見居らぬか。聲山立てて町へ聞え下で濟まぬ詮議になれば。如何なる仕置にあふとか思ふそこをせめても不便さに。高い聲も得せぬわい。これでも己れが心には伯父をつらしと恨むらん。本氣ではよもあらじろくた死をせまいかと。却つて是が不便なりと。涙を流し身をふるはし。ッシ色を。違へて怒りける。お龜涙を押へこれ與兵衛様うろたへまい。言譯なされと言へば。詞イヤ證據もない言譯見苦しげに何かせん。地皆我々が不運なり如何様になるとても。親をも人をも恨みとは思ふまいぞ思やるなど。一聲言うたばかりにて誰がもの言うても返事もせず。歎き沈みし有様は、フシ目もあて

られぬ風情なり。地日の内は外聞悪し表をしめて追出せと。薙おろして情なく引出せば伯母お龜。なう今暫しと取付くをもぎ放しもぎ放し。門より外へ押出し潛戸をはたとさしければ。内には妻の叫ぶ聲外に夫の忍び泣き。涙に曇る十七夜月に。別れて三思出でにけり。ギン宵より二階に。引籠り。ステテ待てど暮せど其の人の。名よとばかりの音便も。早九つの。フシ鐘の聲。書置。涙に。文字消えて。フシ先へ死んだも。ましならめ。ステテしをれわびたる折節に。地ひそかに人の足音すそつと二階の障子をあげ。覗けば夫もかき暮れて互に聲も立てばこそ。うなづき合ひたるばかりにて。フシ泣きくづ。をれしぞ。哀れなる。地用意仕置きしさがへに。夫の白き帷子緋縮緬に結びさけ。下せば下より受取りて。フシ死ぬる覺悟と心得ける。地南無三寶西町より新町戻りの駕籠に提灯。走つて近く車長持。オ

し。地出でなければいつかは釘を放しけん。  
蟲籠窓をはづし帯結下け。傳うて下りん其  
の用意夫は長持曳出し。心を碎く二階に  
は消ゆるばかりに蜘蛛の。絲に懸れる身の  
命露のたよりの危さよ。憂さよ怖さよわな

### 末期の道行

は隙間に長持よりそつと出でてあたりを見。  
先立ち失せし心中の戀の移りの香をとめて。  
梅田橋へと心ざし二三町こそ三三、走りけ  
れ。

は同じ安土町。ワキ生れ變りて又いつか太  
夫沙婆のたよりの備後町。ワキ思へば我も  
元服し。太夫わしも若いに二人鐵槌つけて  
のがれし賽の河原町。太夫三途の瀬戸の淡  
路町。ワキ越れば親の古里の。太夫名に

顔を見合せて息つき胸をしづめしが。此の  
頃とだえし添寝の床ゆかしなつかし戀しや  
ど。互にひしと抱きしめ齒を喰ひしばり息  
をつめ。顔と顔を打合せ。フシ身を隔えて  
ぞ歎きける。地町の夜番が時申し又長持の  
蓋あけて。抱き合ひてぞ忍んだる夜番は物  
に心をつけ。胸けはしく門を敲き立て。こ  
れ起きたく。二階の蟲籠窓を外いて上か  
ら帯が下けてある。長持も出してある盗人  
さうなとわめくにぞ。地家内一度に目を覺  
し二階へ上れば娘はなし。地お龜様が見え  
ぬわそりや提灯よ釣鐘よ。八つ過ぎぢや八  
軒屋河内よ堺よ川口よと。足許へは氣もつ  
かず。フシ手分をしてぞ追駈ける。地夫婦

は月フシ今捨つる。身にも恐ろし犬の聲。辻  
を隔て、見返れば。あれで生れし町所家  
の。なじみもフシ十五年。其の春夏の此の  
月は。祝ひ月とて物思ひ。長持しの字をさへ  
も嫌ひしが死して死骸を知る人に其の死恥  
も包ましく。スエテそなたの鬱亂れずや。い  
や我よりもおの様の。鬚撫付けてかきなで  
て。死んだ跡までよい殿と。人に云はせま  
フシはじ明り。今宵の月を。月々に。待ちし  
もつひに引きかへてオクリ冥途の。使我々を  
待つらんものとかきくれて。涙曇りの十七  
夜。フシ二人が袖に宿しけり。よしや地獄へ  
墮つるとも。スエテたとへ佛になるとても引  
タ、キ必ず契り米屋町。太夫本町筋の軒深  
く。ワキ思ひ染みたる。二人中なれば埋ま

も別る、平野町。二人あけほの近き時太鼓  
どう。地道修町。フシこれやこの。修羅の太鼓  
の。響きかと共に驚く袖と袖。抱き寄せつ  
つ泣くばかり。太夫聞けばわたしも母様の  
三十過ぎての初子とや。二人其の譲りかや  
なれそめて。フシ一夜。離れた。事も。なく。  
かはず枕に子胤のないかオクリ是も。タ、キ産  
ますの數ならば。根を掘る竹の伏見町。太  
夫高麗橋の西東。ワキ床も定めぬ立君はこれ  
も世渡る習ひとて。太夫浮世小路の細き聲。  
太夫唄うて歸る其の歌の。二人品ある中にも  
來ぬ人をまつほの。浦の夕風。太夫やくや  
藻汐の身をこがす。ワキそれは吾妻の。物  
語。地耳に聞きたるばかりぞや。そもじと我  
は難波津の。貴賤群衆の見るめかる尼ヶ崎

町過書町に。はや北濱や牛の島 オクッ明日

知お龜は夫の顔を見て連立つ冥途の道とは

と聞くものを。能い所へよも往かじ火水の

は。歌天満の橋々賣りて。梅田の梅田の堤  
をそめし。紅葉傘屋のな女夫の心中。男廿  
一お龜は十五。年にあはすりや。いたづら  
いたづらちやサア繪草紙る。地よその口の  
端。フシア餘所ごに。買求めては慰みし  
此の身の果を讀賣に。長増たが節つけて田  
舎まで唄ひ流さん鯉川水も濁りて此の世へ  
は。いつ歸りすむ根なし草弓手は。無常の  
燒草と。惜しからぬ身は惜しからず。夫夫  
灰となさうか此の肌。ワキ煙となるか此の  
形。夫夫惜しや。ワキいとしや。二人悲しや  
と。引合ひし手を猶締めて。フシ涙の限り泣  
きつくす。フシ杜の小鳥。川千鳥合法鳥も聲  
さびて。はやしの、めも近付けば。小田守  
る賤に忍ばんと。右へ下れば網舟の目にや  
かゝらん行く先は。はや會根崎の宮仕の朝  
淨めする折なれば。今はせんかた夏草の。  
人目堤の下蔭を。ステエ爰ぞ。夫婦が最期場  
と。フシ泣く泣く。休らひ立ちにけり。

知れど。今今生の別れとて云ひたい事の何  
やらが。胸にはあつて口へ出ず。飽くほど  
顔が見て死にたや心なの短か夜とフシ身を  
投げかけて泣きゐたり。ア、愚かや愚痴や  
あさましや。永き來世があるぞかしさりな  
がら。心にかゝるは其方の父御。二人とも  
無き獨り子を憎や契めが殺せしと。さこそ  
恨み憎しみの。是罪障となるぞとて。フシ共  
に。ひれ伏し泣。きければ。いや父様は男  
氣の思ひ諦め有るべきが。いとしや在所の  
お袋様。姑なりとて一日の。給仕した事も  
なく。大事の子をばよめ故に。失うた殺し  
たとお叱りなされんこれ一つ。目の不自由  
な伯母様の力となるはこち女夫。さぞ今頃  
は泣き悲しみ眼でも眩ぬかどうしたと。胸  
に塞がる是ニツ。又母様の十三年觀音經を  
書きませう。佛になつて下さんせと墓に向  
うて約束の。是が違うた何やかやかくまで  
重き罪科の。閻魔の前には黒鐵の帳に付く

地獄も厭はねども夫妻別れて行かうかと。  
是のみ猶も迷ひぞとステエ聲も惜ます歎きけ  
る。さすが男は力をつけ。一つに行かう  
と別れうと皆一心の向けやうぞ。氷の地獄  
火炎の地獄劍の山へ登るとも。取り交した  
る手は放さじと。心強くは云ひけれどまだ  
蒼花出づる月。玉の様なる若い者若い女  
の頑是なさ。有めらるゝも有むるも。フシ分  
けて分かつたぬ涙なり。地あればや東も白う  
だりサア念佛と云ひければ。心得たりと懐  
より剃刀二挺取出し。これも母様の額たれ  
とて譲りなり。私はこれで死にたいと泣く  
く出す其のなかに。向ふの野道を入通ふ  
あれよくと心は急ぐ。二挺の剃刀一つに  
取り南無阿彌陀佛と引寄すれば。お龜はつ  
ねく信仰の南無觀世音菩薩様。母様の戒  
名教響投倫信女。一つ蓮に導き給へ南無觀  
音様觀音様と。手を合せて待ちけれど男  
は目くれ差うつぶきステエ只泣くより外の事

ぞなき。雄工、うきめを見せて何事と夫の手を取り我が咽喉に押し當つれば思ひきり

。南無阿彌陀佛と笛のくさり。剃刀の刃も折れまといゑぐりはゑぐりしが。若き者の

悲しさは止めの念所は知らずして。未だ息絶えず悶ゆるを。疵の口を隠さんと抱への

帯をくるくると。二三遍引まはず、フシうき目の程ぞ不便なる。我もやがて迫付かんと

咽喉にあつる剃刀の。刃は鋸と折れ碎け皮肉ばかり切れけるを。力を入れて突きけ

れども、フシ通りつべうはなかりけり。無三寶と剃刀捨てそばに抜きおく脇差の。

鞘を持つて引き上る鐔は重し手は弱る。はづんではぬる勢ひに脇差ぬけて樋の口の。

井出の水草の漲つてざんぶとこそは沈んだれ。エ、しなしたりこは如何にと這ひおる

る堤の露。こほれし血に足すべり、池へどうと落ちたりけり。池は深く泥深し

底の脇差奪ねかね。浮きぬ沈みぬ漂ひしが今を最期の眼にも。夫を思ふお龜が心引揚

けんと思ひけん。這ふく岸に寄ると見えしが。くらむ眼に氣も亂れ。同じく池へど

うと落ち互に助け引き上げんと。抱き上ぐればどうと臥し。播き上ぐればかつばと伏

し心ばかりを力にて。なう與兵衛様く、お龜くと呼びかはす。絶えく切るゝ息の

下。此の世からなる地獄かや哀れ果敢なき三層有様なり。疵の口に水入つて女は生年

十五歳。時も皁月の葛蒲咲く、フシ沼の泡と卵ぞ消えにける。夫も死なんと脇差を奪ね

漂ふ朝風。里人下りあひすは心中と飛入り。紅く夫婦を取つて引上ぐる女は死して池水

も。みな紅に名をとむ。男は生きて生きがひのかひもあるかや蜷川あと白。波と

どなりにける。

右之本令吟覽頌句音節墨譜  
等不殘毫厘令加筆候可有開  
版者也

竹本筑後掾

重而予以著述之本令校合候  
畢全可爲正本者歟

近松門左衛門

信盛  
花押

本竹  
教博

大阪高麗橋壹丁目

正本屋山本九兵衛版

山本九右衛門版